人生の意味への問いについての語りの分析

浦　田　　悠

1．問題と目的

「ここに存在していることの目的は何か」「人間存在に何か究極的な意味はあるのか」といった人生の意味や価値への関心は，現代社会において高まってきているといわれる（Baumeister, 1991; 鷲田，2002)。心理学における人生の意味についての研究は，量的手法を中心に展開し，Frankl理論における実存的欲求不満を測定するPurpose in Life（PIL）テスト（Crumbaugh & Maholick, 1969）をはじめ，人生の意味を多次元的に測定するLife Regard Index（LRI）（Battsta & Almond, 1973）や，PILと同じ概念のもとに作成されたLife Purpose Questionnaire（LPQ）（Hablas & Hutzell, 1982)，個人がどれほど人生の意味を発見しているか，また発見する動機を持っているかを多次元的に測定するLife Attitude Profile-Revised（LAP-R）（Reker, 1992）などの尺度が作成されている。また，面接や自由記述による研究では，「個人にとって最も大切なもの」をPMと定義し，質問項目としているものが多い（DeVogler & Ebersole, 1980, 1981, 1983; Ebersole & de Poala, 1987; Taylor & Ebersole, 1993; O'Conner & Chamberlain, 1996; Wong, 1998, etc)。たとえばO'ConnerとChamberlain（1996）は中年男女40人に対して「あなたの人生の中で，重要な意味があると思うものは何ですか」という質問を中心に半構造化面接調査をおこない，RekerとWong（1988）が挙げている個人的意味の3つの要素（「認知的要素」,「動機的要素」,「情動的要素」）を見出している。

人生の意味という語については，「meaning of life」あるいは「meaning in life」という2つが，研究者によって特に区別されることもなく使われてきた。しかしEbersoleとDeVore（1995）は，前者が人類一般の存在理由についての形而上学的問いであるのに対し，後者の問いは，大半が個人的な価値についてのものであり，この二つは異なるものとして扱うべきであるとしている。この区別に従えば，これまで心理学的研究で扱われてきたのは，「meaning in life」すなわち「個人的意味（personal meaning)」の領域であるといえる（ちなみに「meaning in life」に関する心理学的研究においては，「purpose in life」という語のほうがより一般的に使用されている)。

しかし，このように人生の意味を「meaning in life」の領域に限定し，「個人にとって大切なもの」と定義することに関して，TaylorとEbersole（1993）は，この定義では，「大切であってもそれほど意味のない仕事」といったものを説明できないという限界を指摘し，より意味の本質に近づいた定義をすることが望まれると述べている。

また，Kinnierら（2003）は，古今の著名人の人生の意味にまつわる言葉を集め，グラウンデッ

ド・セオリー（GT法）を用いて，内容分析をおこない，10個のメインテーマを見出した。ここで見出されている「人生を楽しむこと」「他者を愛すること」「自己実現すること」などは，これまでの個人的意味の研究においても見出されているが，「人生は謎である」「人生は無意味である」「人生は不条理もしくはジョークである」というような，人生の意味の否定あるいは懐疑にまつわるテーマは，「人生で個人が何を重要視しているか」を具体的に挙げさせる従来の心理学的研究では，方法論的に取り上げることができないものである。しかし，これらのテーマも，「問い」としては問題となっており，たとえば「人生は無意味である」「人生は不条理もしくはジョークである」というような回答は，実存的空虚などの心理的な要因とも密接にかかわる重要なテーマであるといえる。このような具体的な答えのない問いに関わるテーマについては，問いそのものに着目することが必要であろう。これに関して，浦田（2005）は，人生の意味への問いについて，問いの形のままで自由記述を求め，人生の意味の否定あるいは懐疑の形での問いを多く見出している。しかし，その人生の意味への問いがなぜ，どのような文脈で問われるのか，ということについては十分な結果を示すことができていない。

以上を踏まえ，本研究では，人生の意味を「meaning in life」と「meaning of life」，すなわち生きる上での個人的な価値と形而上学的問題の双方を含んだものとして捉える。その上で，人生の意味についての問いを問う途上にある者の様相も捉えるべく，人生の意味への問いについての面接調査を実施し，人生の意味への問いが，どのような文脈でいかに問われ，それが個人の人生観にどのように関わっているのか，ということを検討する。研究の枠組みとして，ナラティブアプローチを採用することとする。これは，ナラティブアプローチが，個人がおこなう意味づけの特徴を，意味づける文脈や語りのつながりから捉えようとする立場であり（Bruner, 1990），人生の意味を問う文脈を捉えるのに適していると考えられるためである。分析においては，人生の意味への問いが，個々の生きる文脈への意味づけとして問われるものであると考えられることから，個人にとっての文脈や語られ方に注目して分析し，各々の人生の意味への問いの特徴を捉えるための新たな枠組みを生成することを目指す。

2．方法

対象

本研究に先立ち，筆者は人生の意味への問いについての質問紙調査を関西圏の大学生・大学院生を対象に実施した（浦田, 2005）。質問紙は，人生の意味を問う程度とその問いの内容に加え，問うきっかけや，問いの個人にとっての重要性についての自由記述を含んだものであった。本研究では，この質問紙調査において，①人生の意味を問う頻度が高く，②問いの記述内容が人生の意味への問いを含んでおり，③過去に特に真剣に人生の意味を問う経験があった，ということを参考に対象者を選択した。結果，研究者とすでにある程度のラポールが成立している関西の大学の大学生・大学院生5名（男性3人，女性2人）が選択された。

Aさん　男性　薬学系大学院生2回生　25歳
Bさん　女性　心理学系大学院2回生　24歳
Cさん　女性　心理学系大学院1回生　23歳

Dさん　男性　文学系大学院生1回生　24歳
Eさん　男性　医学系大学生5回生　22歳

面接

面接は，人生の意味への問いについての質問紙の回答結果をもとに，自由度の高い半構造化面接をおこなった。面接の質問項目については，①人生の意味への問いの文脈を捉えるためには，人生の意味という語の個人にとっての意味づけの特徴を明らかにする必要があること，②全対象者の人生の意味への問いの自由記述において，死との関連で人生の意味への問いが記述されていたことから，各対象者に共通した質問は，①「あなたが人生の意味と言うとき，それは，どのような意味合いでそう表現しますか」という，人生の意味という言葉の個人にとっての意味合いを問う質問と，②「あなたにとって，死あるいは死ぬということはどのようなものですか」という，死についての価値観を問う質問の二つを設定した。

面接は，教室など大学構内でおこなわれ，許可を得たうえでテープまたはミニディスクに録音し，逐語文字化して，分析の資料とした。実施回数はそれぞれ1回，面接時間は，質問紙の回答時間も含め，約1時間程度であった。

調査時期

2004年10月～11月

3．分析

面接調査の分析に関しては，本研究においては，人生の意味への問いについて，その意味づけの特徴を個人の語りの文脈において捉えることを目的とするため，質的コード化の手法（Coffey & Atkinson, 1996）とそれに基づいた徳田（2004）の研究を参考にして分析を行った。質的コード化とは，データに即した分析カテゴリーを生成する質的分析法の一つであり，あらかじめ設定された枠組みではなく，データそのものからカテゴリーを生成し，分析に用いるものである（徳田，2004)。まず，内容や語りの特徴に沿ってデータを区分し，そこに適宜ラベルを与えコード化する。つづいて，そのラベルについて繰り返しデータ間の比較を行い，各々の語りの類似性と差異から，個々のラベルを整理，統合するカテゴリーを生成していく。そして，生成されたカテゴリーは，再度データに立ち戻って検討され，修正を加えられることによって洗練される。このようにすることで，データに即したカテゴリーが生成されるというものである。以下に，その分析カテゴリー生成と類型化のプロセスを示す。

分析カテゴリー生成のプロセス

「あなたが人生の意味を問うとき，それはどのような意味合いでそう表現しますか」という人生の意味への問いの質問について，それぞれの繰り返し語られるフレーズに注目し，語りの内容の特徴と差異からコード化をおこなった結果，①「人生の意味は神によって与えられており発見されるもの」，②「人生の意味は自分で創造する，あるいは，他者との関係の中で生まれてくる

もの」，③「人生の意味はない」という3つの下位カテゴリーを抽出した。また，二つ目の質問である「あなたにとって，死あるいは死ぬということはどのようなものですか」という質問に対する語りには，「死んだらどうなるのか」というような「死の解釈」についての語りと，「いつか死ぬとわかっていてなぜ生きるのか」というような「死を前にした人生の意味」についての語りが見られ，それぞれを分析カテゴリーとして抽出した。

「人生の意味」の意味づけ方を軸とした類型化

このカテゴリーを生成した上で，再びデータに立ち返り，各人の面接の語り全体のの文脈を改めて検討し，分析カテゴリーとして抽出された人生の意味の個人にとっての意味合いの3つのカテゴリーと，死についての価値観についての2つのカテゴリーの特徴の関連を探った。その結果，「人生の意味」の意味づけ方を軸に，「死の解釈」，「死を前にした人生の意味」が文脈の流れとして位置づけられたことから，「人生の意味」の意味づけ方に基づいた類型化をおこなった。

4．結果

「人生の意味」の意味づけ方に基づいて，類型化を行い，3つのパターンを見出した。すなわち，「意味は，発見されるもの，与えられるもの」（パターン1：Aさん），「意味は自分で創造する，あるいは，他者との関係の中で生まれてくるもの」（パターン2：Bさん，Cさん，Dさん），「意味や価値は存在しない」（パターン3：Eさん）の3つである。それぞれのパターンで見られる特徴の骨子だけを抜き出すと，表1のようになる。以下に，それぞれのパターンで見られた語りについての具体的内容とその語りの特徴を示していく。

表1　3つの人生観のパターンの概要

	意味についての解釈	意味への問い	意味を問う視点	死の解釈	死を前にした人生の意味	各パターンに特徴的な語り
パターン1	与えられるもの・発見されるもの	・進むべき道は何か ・与えられている道は何か	神の視点	・この世での役目を果たしたときに訪れるゴール ・死後の世界への入り口	人間はその意味を知ることはできないものの，意味は与えられている	意味の不可知性へのとまどい
パターン2	創造するもの・他者との関係の中で生じるもの	・何ができるか・ ・何がしたいか・ ・いかに生きるか	俯瞰的な視点	無・存在の消滅	死んでも残された他者に何らかの影響を残すかもしれない	懐疑的な語り
パターン3	意味も価値も存在しない	・無意味な人生でできることは何か？	客観的な視点		死んで無になったとしても，生きたという事実は残る	語りの揺れ 堂々巡り

パターン1：「意味は，発見されるもの，与えられるもの」（Aさん）

①「人生の意味への問い」の語りの特徴

- 「人生の意味への問い」についての質問では「大前提として，人生に意味はあるっていうのは，信じてるわけ，無条件に。そしてその意味は何かっていうのはよく考えるけど，意味があるかどうかっていう根本的なところは信仰があるから，そこは迷わない」「（意味は作り出すものな

のかという問いに対して）作り出すっていうよりは，あるはずだから見つけるもの，っていうかな。だから，自分でがんばらなくても，何かしらあるはずなので……」という語りに見られるように，人間が人生の意味を理解することはできなくとも，それは神から与えられており，それを発見することが人生の目的である，というように位置づけられている。

・「上から見たら，それでちゃんと意味があることなんだろうけど」「人間から見ると，働き盛りで死ぬ人もいるし，不本意な死に方をする人もいらっしゃると思うんだけど，神様の視点から見ると，その人の役割はもう終わったから，っていうことで死ぬんじゃないかな」という語りに見られるように，ここで人生の意味を捉える視点は神からの視点である。

②死の解釈について

・死とは何かということに関して，「やるべきこととか，あと，走るべき道を走り終えたら，そこにゴールがあるわけで，それがたぶん，人生っていうものだと，死っていう形になってると思う」「生まれ変わりとかはないと思うけど，死後の世界っていうのはあると思う」というように，死は人生の一つのゴールであり，死後の世界に向かうための通過点と解釈されている。

③死を前にした人生の意味について

・「神様が書いたシナリオをね，たぶん人間は，最初から最後まで読めないわけ。どういう意味があってこういうことになってるかっていうのは，たぶん人間の知恵では分からないことなんで，たとえば自分が，あとどれくらいで死にますっていうのは，それはたぶん，上から見たら，それでちゃんと意味があることなんだろうけど，自分としては納得できないこともあると思う」というように，ここでも信仰によって，神の意志によって死には意味が与えられているものだ，とされている。

④パターン1の特徴

このパターンに分類されたAさんは，子どものころからクリスチャンであり，大学院を卒業した後，牧師になるために，神学大学に進学予定である。このパターンの語りは，一貫して確固とした宗教観を反映しており，神から与えられている意味を発見し，自分に与えられた役割を果たすことが，人生の目的であるという人生観である。そして，死もまた終わりではなく，この世での役目を終えた時点での一つのゴールであり，死後の永遠の生命へと続く道の過程であると捉えられている。

ただ，「（もし自分に死が訪れるときには）いざとなったらじたばたするかもしれないけど……」という語りがあったが，「どうしてじたばたするのだろう」という質問には，「理解としては，神様は，必ず，なんていうのかな，よいようになさるはずなので。でも自分の理解ではそうでないことがあるかもしれないやんか。そうすると，よいことをしてくださる神様っていうのは疑わずに，自分の理解のほうを疑うことになるので，とまどうのかな……」と語り，死や苦しみについても，信仰を基盤にして理解しており，「とまどう」のも，信仰を基盤にした上でのものであることがうかがえる。

パターン2：「意味は自分で創造する，あるいは，他者との関係の中で生まれてくるもの」（Bさん，Cさん，Dさん）

①「人生の意味への問い」の語りの特徴

- 「人生を意味あるものにしたい」（Dさん），「まあ，いつか死ぬかもしれないから，今が，一日一日を大切に生きられれば，まあ，いつか死んでしまっても，それでいいかな，って」（Bさん），「生まれてきたからには，自分は満足して生きたいと思うんで，自分は人生をちゃんと考えようとは思うんですよ」（Cさん），「考えれば考えるほどその人生は濃くなっていくと思うし，だからこそ生き抜いたときに達成できるんじゃないかって思うんですよ」（Cさん）というような語りに見られるように，人生の意味というものを自分の人生の内側から「意味づける」というものである。ここで，人生の意味として捉えられているのは，「満足感」や「達成感」である。
- 「今私が会ってる人たちには，まあ，真心でもって接したいとか……」（Bさん），「人が生きていくにあたって，いろんな影響を与え，与えられて生きていくから」（Cさん），「誰にも必要とされなかったら，なんで生きてるのかなって思ったら……」（Cさん）というように，人生の意味は他者との関係において生じてくるものとしても捉えられている。
- 「この世界がすべてのように感じるけど，自然の中の人間とかそういう単位で考えたときは，ぜんぜんそうじゃないのにな，って……うん，たぶん，こだわりから離れたいときとかに思うのかもしれない」（Bさん），「人間って生まれてきて死ぬまで，何年か人生あるけど，何で生まれてきたん？って思うんですよ。」（Cさん），「自分がっていうのから人がっていうのに広がっていくんですけど」（Cさん），「（むなしさを感じるときの文脈は）もっと社会的な感じ，もっとでかい気がする」（Dさん）というように，人生の意味を問う際の視点は，いずれも主観的なものの見方を離れて社会的，あるいは時間的に俯瞰的な視点を持ったときであることがわかる。

②死の解釈について

- 「死ぬのってすごく重大なことで，自分にとっては，存在がなくなるんだから……」（Bさん），「自分自身については無になると思うんですよ」（Cさん），「無をイメージしたりする。なんか渦巻いていくような」（Dさん）というように，死それ自体は，自分という存在がなくなること，無になることとして捉えられている。

③死を前にした人生の意味について

- 「自分が死んだことで他人が引き継ぐ何かはあるかもしれない」（Cさん），「自分は，自分の存在が消えても，誰かには残るからいいかなって感じです」（Cさん）というように，死を前にしても，残された他者になんらかの引き継ぐものがある，というある種の世代継承性によって，死すべき運命にある人生の意味というものが語られている。
- 「死ぬのと同じくらい大事な過ごし方をしたいから……死んでも全然いいやっていうくらい，死と同じ価値を持つくらいに，生きれたらいいなあ，って……」（Bさん）というように，無としての死に対して今ある生を対置し，生きることの大切さを表現する，という語りもみられた。

④パターン2の特徴

いずれの人の語りにおいても，「人生の意味」という言葉は，まず第一に，その人にとって重要な価値のあるもの，そして，その上で自分の周りの人にとって価値のあることを漠然と指すものとして解釈されている。そして第二には，自分の人生を価値あるものにするための時間的展望の明確さにまつわるものとして使われている。ゆえに「人生の意味とはどういうものを意味と表現しているのか」という質問に対しては，「自分は満足して生きたいと思うんで……」（Cさん）「何がしたいんだろう，この短い一生の中で，どういうことがしたいんだろう」（Bさん），「成し遂げたいって思う」（Dさん）というような間接的な答え方がされるということが特徴的である。

また，「人生の意味への懐疑」についての語りもパターン2に特徴的な語りとして見られた。「でも人間は何でこう地球の上に，いろいろ物質的なものをがんがん立てて道路ひいてルール作って，それでこんなにいろんなものにこだわりながら生きていくのかなあ，ていうのがまずあって……」（Bさん），「生きるために生きてるんですけど，生かされているような気がしなくもないじゃないですか，自分の意志で生まれてくるわけではないし……っていうことを考えたら，私たちっていうか，私にとって人間っていうのは無に等しいんじゃないかなって思うんですよ」（Cさん）というように，無意味なものかもしれない人生への懐疑が語られた。

パターン3：「意味や価値は存在しない」（Eさん）

①「人生の意味への問い」の語りの特徴

- 「外から与えられる意味も，自分で見出す意味も，何もかもがないっていうことなんじゃないでしょうか」「（人生に意味はないとEさんが言い切るのはなぜか，という質問に対して）やっぱりその，生きる目的とか意義っていう概念も，概念自体が，その人間が作り出したものであって，その人間がいつかは死滅しちゃうからじゃないでしょうか」というように，発見されるような意味はもちろん，創造するような意味も人生には存在しないという観点の語りが見られる。
- 「（人生の意味をどんなときに問うか，という質問に対して）やっぱり家にいてて，暇なときとかですかね。あんまりその，普通に社会生活を送ってるときとかはあんまり考えないじゃないですか。やっぱり，その，普段社会生活を送ってるときは，その，主観的に行動してるじゃないですか。でも，家に帰ってきて，その，ちょっとふと今日やったこととかを思い出したら，自分が客観的に見えてくるじゃないですか。そういう時ですかね……」というように，パターン2と同じく，主観的なものの見方を離れた文脈で人生の意味を問うという語りがいくつか見られた。

②死の解釈について

- 「（死ぬと）何もかもなくなるんじゃないでしょうか」「死によって，なにもかもがチャラになるっていうのが，もう，なんというか，その，自分の全てが否定されてるようなもんじゃないですか」というように，パターン2と同じく，死というものを存在の消滅と捉えているといえる。

③死を前にした人生の意味について

・「XY平面上に線分があるように，なんかこの，ある位置よりも，あるX軸の値が，ある値よりも大きいときに，その線分が存在してなかったとしても，その線分は存在してるじゃないですか。だから，別になくなったからといって，その，例えば，僕が死んだ時点で世界がなくなるとしても，価値が，例えば価値があったとしたら，それによって価値がなくなるということにはならないような気が…。（つまり，過去に生きたっていう事実が残るっていうこと？）はい，まあそういう感じですかね」というように，自分が生きたという「事実性は滅びることはない（Jankelevich, 1966)」ということに関連した内容の語りが見られた。

④パターン3の特徴

パターン3において「人生の意味がない」というときの「意味」という語は，「なにもかも含めるんじゃないでしょうか」と語られているように「the super-ultimate why-questions (Edwards, 1981)」に関わる意味や価値を指す一方で，「自分で意味とか価値とかを見出したとしても，やっぱり結局それには意味も価値もないわけだから」というように，「なにもかも含める意味」の中にあるような個人が創造する意味や価値も指している。そして，それら全てが存在しないというわけである。

そして，「ただ生きてるっていうのは苦痛じゃないですか。だから，その，そういうふうに認識しちゃったら，生きる目的がなくて苦しいんで，じゃあ，一体どういう目的を見出して生きていけばいいのかなっていうのは，最初によく考えた」と語り，「意味とか価値とかは，もうないと思うんですけども，ないと考えたときにじゃあどうしようかなっていうんですけども，うーん，やっぱり，できることといえば，今ここに生きてることを最大限味わうことかな，っていう感じがするんですけども……」という一応の結論に至っている。そして，「今はあんまり意味を考えなくなったっていうことなんだけど，それはどうしてかな？」という質問には「いや，だからもう意味はないからですよ」と答えている。しかし，その語りのすぐ後にも「まあ，でも考えてしまいますけどね」とあるように，やはり意味はないと思っても，意味への問いを問わずにはいられないという「揺れ」あるいは「堂々巡り」が随所で表現されている。

5．総合考察

3つのパターンについて

本研究では，5名の大学生・大学院生に面接調査を実施し，それぞれの語りを分析した結果，「意味」という語をどのように捉えているか，ということを軸に3つの「人生の意味への問い」についての語りのパターンが見出された。「意味は，発見されるもの，与えられるもの」（パターン1）という語りは，神の視点から「意味」というものを理解した上での語りであり，他の二つのパターンの語りとは明らかに異なる様相を呈していた。語りにもあったように，「信仰」は「無条件」であり，ある意味では，あらゆるものごとの根拠を全て無条件に説明しうる基底的なものである。そのため，語りは非常に首尾一貫しており，揺れや循環は見られなかった。もっとも，現代日本の青年においては，このような「意味」が神から与えられているという視点は少ないと

思われる。浦田（2005）が，「生きる意味」についての自由記述から「意味の源（sources of meaning)」について検討をおこなった際にも，アメリカの研究で必ず見られている「religious belief」についての意味の源は全く見られなかった。そして，意味の源のうち最も多く見られたのが「関係」と「喜び」であったことを考えると，「意味は自分で創造する，あるいは，他者との関係の中で生まれてくるもの」（パターン2）の語りが，現代青年には最も一般的なものであろうと思われる。しかし，パターン2では，「人生の意味への懐疑」が伏線として語られることがあり，「意味や価値は存在しない」（パターン3）という語りとの境界線は，あまりはっきりしたものではないと考えられる。逆に，パターン3の語りにおいても，「意味や価値は存在しない」としながらも，そのように考えることの「大切さ」について語るという「語りの揺れ」も見られることから，パターン3からパターン2へも比較的容易に移行しうるのではないかと思われる。このような点については，縦断的な調査が必要であるが，どちらの場合も，「人生観」すなわち「人生とその有する意味の理解・解釈・評価の仕方（広辞苑)」のある種の「揺らぎ」が「人生の意味への懐疑」を生み，それが「人生の意味への問い」へと収斂していくといえるだろう。

「語りえぬもの」の語り

「人生の意味」という問題は，根本的に「語りえぬもの」を多く含んでいるといえる。今回の面接での語りにおいても，たとえば，「死ぬのと同じくらい大事な過ごし方をしたいから……死んでも全然いいやっていうくらい，死と同じ価値を持つくらいに，生きれたらいいなあ，って……」（Bさん）のように，本来比較不可能な「生」と「死」を比べるという語りや，「無をイメージしたりする。渦巻いていくような」（Dさん）という不可視なものの視覚的な表現などが見られるし，Eさんの循環的な語りも，結局は「今ここに生きていること」という「語りえぬもの」の周囲をめぐる語りであるともいえる。このように，「語りえぬものを前にして，人はいかに語るのか」ということに注目し，語りの揺れやズレや循環に注目することは，「人生の意味」のような，本質的に語ることができない生や死の問題について考える上で重要な視点となるのではないかと思われる。

「私の死」とgenerativity（生成継承性）

人生の意味への問いが，単なる「生きていること」の意味への問いだけではなく，「生まれて生きて死ぬ」という人生というもの全体への問いも含むとするならば，それには死や死後の捉え方という死生観のあり方が密接に関わってくるであろう。

このような現代人の死生観について，やまだは1994年から研究を開始し，その後日本とフランスの国際共同研究によって，他界観についての質問紙やイメージ画を用いて多角的に研究をおこなっている（やまだ，2001; やまだ＆加藤，1998; Yamada & Kato, 2001; Kato, Yamada, Wallon, Mesmin, Ito & Toda, 2004)。イメージ画の分析では，日本，イギリス，フランスの青年において，「あの世」が「この世」の上にあり，死者は雲の上からこの世の人を見下ろして気にかけているというイメージが多く見られている（Kato, Yamada, Wallon, Mesmin, Ito & Toda, 2004)。森岡（2003）も言うように，たとえ「死んだら無になる」と考えている唯物論者が「私が死んだ後のこの世界」というものを想像する場合でも，自分が不在のまま続いていくこ

の世界というものを，イメージ画に見られたように，どこか雲の上から覗き見るような形で想像しているのではないだろうか。世界は常に私から眺められた「私の世界」というあり方をしているために，暗黙のリアリティの次元では「世界が存在するとき，その世界を見ている私も必ず存在しているはずだ」と思ってしまうのである。森岡は，この想像の世界の中には，いわば，いないはずの「私の存在」が密輸入されている，と指摘している。たしかに唯物論的に考えれば，私の死とはそのような暗黙のリアリティの次元での「私の世界」それ自体が消滅することであるはずだが，私たちは原理的にはありえないような「私の存在しない世界」を視覚的に想像するのである。本研究の面接での語りを例にすると，「私の死」を「永遠の無」として捉えている人において「自分は，自分の存在が消えても，誰かには残るからいいかなって感じです」という語りがあった。しかし，「いいかな」と納得している主体は誰か，ということを厳密に考えてみると，そこには「死んだ後，誰かに自分の影響が残っていることを確かめて納得している死後の自分」というものも含まれているといえないだろうか。このような「私の死」に限定した他界観についても，今後さらなる検討が必要であろう。

また，上の面接での語りにも「誰かには残るからいいかな」という表現があるように，人間の生と死は，個人の生と死であるだけではなく，人と人，世代と世代をつなぐライフイベントである（やまだ，2000a b c)。これは，やまだ（2000a）がEriksonのジェネラティヴィティ（世代継承性）の概念をライフストーリー研究や世代間伝達の見地から修正した「生成継承性」の問題であり，人生観や死生観について発達心理学的な視点から考えようとすれば，この生成継承性の視点が不可欠となってくるであろう。

今後の課題

本研究では，面接によって，人生の意味への問いをどのような枠組みで取り上げることができるかということを検討するために，個人の人生の意味の意味づけから捉えるという観点から類型化をおこなった。本研究は，問いそのものに着目し，その意味づけのあり方を探ることによって，人生の意味についての心理学的研究においてこれまで取り上げられることが少なかった「meaning of life」の側面も含めた研究や，問いの途上にある者の人生観の様相の研究の方向性を示唆しているといえる。しかし，対象者が限定されていることと，それによる一般化の困難から，まだ人生の意味への問いについての包括的なモデルを構築する段階にまでには至っていない。今後は，後期青年期だけを対象にするのではなく，中年期，老年期など，青年期とは大きく異なる人生の諸問題が立ち表れる時期についても対象とし，人生の意味の意味づけが，いかなる文脈において，いかなる事象との関連で獲得されていくのか，という研究を整理し，知見を蓄積していく必要があるだろう。

引用文献

Battista, J. & Almond, R. (1973). The development of meaning in life. *Psychiatry,* 36, 409-427.
Bruner, J. M. (1990). *Acts of Meaning.* Cambridge, MA: Havard University Press.
Baumeister, R. F. (1991). *Meanings of Life.* New York: Guilford Press.
Coffey, A. & Atkinson, P. (1996). *Making Sense of Qualitative Data: Complementary Research*

Strategies. Thousand Oaks: Sage Publications.

Crumbaugh, J. C. & Maholick, L. T. (1964). An experimental study in existentialism: The psychometric approach to Frankl's concept of noogeneic neurosis. *Journal of Clinical Psychology,* 20, 200-207.

DeVogler, K. L. & Ebersole, P. (1980). Categorization of college students' meaning in life. *Psychological Reports,* 46, 387-390.

DeVogler, K. L. & Ebersole, P. (1981). Adults' meaning in life. *Psychological Reports,* 49, 87-90.

DeVogler, K. L. & Ebersole, P. (1983). Young adolescents' meaning in life. *Psychological Reports,* 52, 427-431.

Ebersole, P. & DePaola, S. (1987). Meaning in life categories of later life couples. *Journal of Psychology,* 121, 171-178.

Edwards, P, (1981). Why. In E. D. Klemke (Ed.), *The Meaning of Life* (pp. 227-240). Oxford University Press.

Ebersole, P. & DeVore, G. (1995). Self-actualization, diversity, and meaning in life. *Journal of Social Behavior and Personality,* 10(1), 37-51.

Hablas, R. & Hutzell, R. R. (1982). The Life Purpose Questionnaire: An alternative to the Purpose-in-Life Test for geriatric, neuropsychiatric patients. In S. A. Wawrytko(Eds.), *Analecta Frankliana.* (pp. 211-215), Berkeley, CA: Strawberry Hill.

Jankelevich, V. (1966). La Mort. (仲沢紀雄訳. (1978). *死.* みすず書房.)

Kato, Y., Yamada, Y., Wallon,Ph., Mesmin, C., Ito, T. & Toda, Y. (2004). Les representation spatiales de ce monde et l'autre monde vues dans les dessins des etudiants japonais, vietnamiens, francais, et anglais. (日本，ベトナム，フランス，イギリスの大学生のイメージ画にみる「この世」と「あの世」の空間表象）. *科学研究費研究成果報告書.* 129-140.

Kinnier, R. T., Kernes, J. L., Tribbensee, N. E., & Puymbroeck, C. M. (2003). What eminent people have said about the meaning of life. *Journal of Humanistic Psychology,* 43(1), 105-118.

森岡正博. (2003). *無痛文明論.* トランスビュー.

O'Conner, K. & Chamberlain, K. (1996). Dimension of life meaning: A qualitative investigation at mid-life. *British Journal of Psychology,* 87(3), 461-477.

Reker, G. T. & Wong, P. T. P. (1988). Aging as an individual process: Towards a theory of personal meaning. In J. E. Birren & V. L. Bengtson (Eds.), *Emergent Theories of Aging* (pp. 214-246), New York: Springer.

Reker, G. T. (1992). *Manual of the Life Attitude Profile-Revised.* Peterborough, ON: Student Psychologists Press.

Taylor, S. J., & Ebersole, P. (1993). Young children's meaning in life. *Psychological Reports,* 73, 1099-1104.

徳田治子. (2004) ナラティブから捉える子育て期女性の意味づけ：生涯発達の視点から. *発達心理学研究.* 15, 13-26.

浦田悠. (2005). 人生の意味への問いについての一考察—現代青年の人生観の諸相—. *未公表修士論文.* 大阪大学大学院人間科学研究科蔵.

鷲田清一. (2002). *死なないでいる理由.* 小学館.

Wong, P. T. P. (1998). Implicit theories of meaningful life and the development of the Personal Meaning Profile. In P. T. P. Wong & P. S. Fry (Eds.), *The Human Quest for Meaning* (pp.111-140). Lawrence Erlbaum associates.

やまだようこ編. (2000a). *人生を物語る—生成のライフストーリー.* ミネルヴァ書房.

やまだようこ. (2000b). 喪失と生成のライフストリー—F1ヒーローの死とファンの人生. やまだようこ編. 人生を物語る. ミネルヴァ書房. 77-111.

やまだようこ. (2000c). 死にゆく過程と人生の物語. カール・ベッカー編. *生と死のケアを考える*. 45-65.
やまだようこ（研究代表者）. (2001). 日仏青年の他界観の生涯発達心理学的研究. *科学研究費研究成果報告書*.
やまだようこ・加藤義信. (1998). イメージ画にみる他界の表彰—この世とあの世の位置関係. *京都大学教育学部紀要*. 44, 86-111.
Yamada, Y. & Kato, Y. (2001). Images of the soul and the circulatory cosmology of life: Psychological models of folk representations in Japanese and French youths' drawings. *京都大学大学院教育学研究科紀要* 47, 1-27.

（教育方法学講座　博士後期課程1回生）

（受稿2005年9月9日、改稿2005年11月28日、受理2005年12月8日）

Narrative Analysis of the Question about "The Meaning of Life"

URATA Yu

This study examines the questions about the meaning of life. Two aspects of the meaning of life were assumed in this research: about the meaning of the word "meaning" in "What is the meaning of life?" and about the meaning of death for the participants. One college student and 4 graduate students participated in an individual semi-structured interview. Through a qualitative analysis using a narrative approach, three meaning patterns were extracted from these narratives: (1) Meaning is to be founded or to be given. (2) Meaning can be individually created. (3) There is no meaning or no value in life. Pattern (1) was coherent narrative about the meaning of life from the religious perspective, but patterns (2) and (3) showed skepticism and hesitation around their narrative, and there seemed to be no clear boundary between these two patterns. These narratives also showed visual metaphors about invisible concepts such as death, and comparative representations between life and death, which are incommensurable. It may be because the meaning of life is the topic "whereof one cannot speak."